

「政和通宝」、明代の制作と思える染付の鉢片、金箔押瓦片とともに木簡が一点出土している。山根氏は窪地について、幅四〇五〇mm程もある南北方向の旧河道があって、豊臣秀吉による大坂城構築時に完全に埋ったものと考えておられる。

当該地は豊臣氏大坂城期、慶長三〇四年（一五九八）に三の丸にとりこまれた地域である。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「(大) 一□□斗

石蔵五右衛門尉
川次郎右衛門尉

・「日向納 □□□

右衛門尉

□□□

木簡は「幅一寸長さ五寸ばかり」の大きさで、「米俵にでもさし込んだえふ、ようのものと考えるが、読み得る人名の最下に、何々右衛門尉と読めるのであり、その書体から見ても、まづは秀吉在世当時のものと推定せられるのである。」と釈文と所見が述べられている。荷札・付札の木簡で、形は頭部の切り込みについては判然としないが、下端は尖っていたのであろうか。

近接する豊臣期大坂城三の丸跡で出土した木簡について佐久間貴士氏は、荷札・付札には屋号、品名、数量、人名が書かれていて、人名は基本的には差出人であるといわれる。(大)は屋号、一□□斗

は数量、石蔵某・□川某は差出人であろうか。別の面は受取人、品名、差出人が書かれていると推測することもできる。

この木簡は大坂城跡から出土した最初のものである。最近の調査からみても豊臣氏大坂城期としてほぼ間違いないと思われるが、今後の周辺の調査や木簡の資料が増えていくことによって、内容や年代がより確かなものになっていくだろう。

9 関係文献

榮原永遠男「現大阪城周辺出土の木簡」(追手門学院校地学術調査委員会『大坂城三の丸跡』一九八二年)

佐久間貴士「大阪・大坂城跡」『木簡研究』一一一九八九年)

(八木久栄)